

277 子宮頸癌Ⅲ期症例の再発、予後に 関する検討

国立がんセ・中央

池田俊一, 種村健二郎, 山田拓郎, 恒松隆一郎,
近江和夫, 園田隆彦

〔目的〕放射線治療を行った子宮頸癌Ⅲ期症例の再発、予後をretrospectiveに検討し、その臨床像を明らかにすることを目的とした。

〔方法〕1979年から1990年の12年間に当科で初回治療に放射線単独療法を行った子宮頸癌Ⅲ期163例を対象とし、その組織型、分化度、水腎症の有無、再発部位、予後について検討した。

〔成績〕Ⅲ期症例の内訳はⅢa期8例、Ⅲb期155例で平均年齢64歳であった。組織型別では扁平上皮癌144例、腺扁平上皮癌8例、腺癌6例、未分化癌5例であった。Ⅲ期全体の5生率は49.9%で、臨床期別ではⅢa期52.5%、Ⅲb期48%であった ($P=0.37$)。治療前に水腎症を呈した症例は58例、水腎症の認められない症例は105例で、水腎症の有無による5生率は水腎症を呈したものが38.9%、水腎症を認めないものは54.1%であった ($P=0.06$)。再発症例は60例で、放射線治療開始から再発までの期間 は 611 ± 486 日、再発から死亡までのmedian survival time は170.5日であった。組織型別では扁平上皮癌144例中49例 (34%)、腺扁平上皮癌8例中5例 (62.5%)、腺癌6例中5例 (83.3%)、未分化癌5例中1例 (20%) に再発を見た。再発部位は局所骨盤内22例 (37%)、胸腹水5例 (8.3%)、肺13例 (22%)、骨3例 (5%)、肝4例 (6.7%)、旁大動脈節から頸部リンパ節8例 (13.3%) であった。

〔結論〕放射線治療を行った子宮頸癌Ⅲ期症例では、腺扁平上皮癌、腺癌の再発率が高い。再発部位別では局所骨盤以外の遠隔転移が63%を占めた。また再発から死亡までのmedian survival time は170.5日であった。

278 進行子宮頸癌に対する手術療法+化学療法での治療効果と長期予後の検討

東海大

村松俊成 平澤 猛 前田大伸 平園賢一
宮本 壮 村上 優 篠塚孝男 黒島義男
牧野恒久

〔目的〕子宮頸癌においてリンパ節転移例や、Ⅲ、Ⅳ期の進行例は依然として予後不良と言える。我々はこのような子宮頸癌進行例に対して従来の治療法に加え、術前、術後の化学療法と術中放射線照射を含めた集学的治療を行ってきた。今回は進行子宮頸癌Ⅲ、Ⅳ期と、Ⅰ、Ⅱ期でもリンパ節転移を認めた症例について手術及び化学療法の効果と予後を検討した。〔方法〕術前化学療法の適応はⅠ、Ⅱ期でも第2次リンパ節まで転移の疑われるもの、及びⅢ、Ⅳa期症例。術後化学療法は、第2次リンパ節転移の認められたもの、3個以上の転移を認めたもの、及びⅢ、Ⅳa期症例で行った。そのregimenはIFO, THP, CDDP (IAP療法) の3者併用を術前に1~2クール行い、術後に1~3クールを行ってきた。対象は1985年より上記の基準にしたがって治療を行ったⅢ、Ⅳ期とリンパ節転移を認めた子宮頸部扁平上皮癌症例で治療後4年以上を経過した28症例である。それらの臨床進行期はⅠb期1例、Ⅱa期1例、Ⅱb期8例、Ⅲa期1例、Ⅲb期12例、Ⅳa期4例である。〔成績〕進行期別の5年生存率は、Ⅱ期70%、Ⅲ期57.1%、Ⅳ期25%であった。リンパ節転移個数別にみると、2個以下のリンパ節転移では80%、3個以上では61.1%であった。特にⅢb期12例において、術前化学療法で広汎性子宮全摘が可能となった症例は7例あり、不可であったものは5例であった。その5年生存率は前者で71.4%、後者で20%であった。〔結論〕子宮頸癌のリンパ節転移例や、進行例に対して手術、化学療法 (IAP療法) を含む集学的治療を行うことで長期予後の改善がみられた。特にⅢb期においては術前化学療法により手術可能で原発巣を切除しえたものは予後良好であった。